【土木計画学研究・講演集 No.12 1989年12月】

都市河川空間の研究*

江戸期の隅田川の河川環境とレクリエーション

URBAN RIVER AREA STUDY

The Environmental Impact of Recreation on the Sumida River during Edo Period

長屋 静子** 土屋 十圀***

by Shizuko Nagaya Mitukuni Tutiya

During the Edo period, rivers were the lifeblood to the growth and development of Edo (the original name for Tokyo). The Sumida River was one such important waterway.

By studying ukiyoe drawings of the sights of Edo, the river is seen to be the main source of life and leisure for the community. Swimming, boating, fireworks, viewing cherry blossoms, walks along the riverside as well as parties were some typical forms of recreation centered on the Sumida River.

A 7 km section of the Sumida River between Shirahige bridge and Tsukuda Island was selected for this study. Focus was on the organization of high density recreation space, recreation activities, and how the river environment supported them.

Improvements on the Sumida River as an urban waterway are under way. And it is hoped that the results of this study will emphasize the importance of the Sumida River on the present day life and leisure activities of its surroundings.

1. はじめに

現在の都市河川の環境向上手法として、水辺のテラス、緩傾斜堤防、環境護岸、リバーサイドスクエア事業、橋のライトアップなど多くの親水化事業が行われ、治水優先の河川整備から、親水のための河川整備へと転換を見ることができる。

しかし、一旦、排水路と化し、人々との係わりを喪失した都市河川が、新たな時代のニーズに合った空間として甦えり、魅力的な都市河川として人々の本来的な係わりの出来る身近な場所となるには、従来の親水化事業の方法だけでは問題点が残されると思われる。

また、都市河川は高密度な市街地を流下するため、そのオープンスペースは都市空間としての価値がきわめて重要であり、産業優先の高度経済成長からの反省として、都市的自然に根差したレクリエーション空間としてのゆとりやうるおいなどの付加価値をも求められているのが現状である。

江戸期の隅田川には、固有の川と人々との豊かな係わりが多彩に展開されており、このことは多数の浮世絵や江戸名所の紹介から、レクリエーションの場としての河川空間の形態や親水行為を読み取ることが可能である。本研究では、以上の視点から、当時に世界最大の都市と言われた江戸の代表的な河川であった隅田川を考察し、河川環境とレクリエーション、河川施設等を明らかにすることによって、市民のレクリエーションに適した都市河川整備計画の基本的なありかたを提示することを目的とした。

*キーワーズ 河川環境 レクリエーション, 河川施設

** 水環境造形研究会
(〒171 豊島区高田2－17－26の402 号アルゴ都市設計)

*** 正会員 東京都土木技術研究所
(〒108 港区港南1－1－18)

2．隅田川のレクリエーション的利用について

隅田川は、古くは利根川水系末流の一派であったが、寛永6年（1629）に利根川から荒川に付変えられ、現在の河道に整備された。また、明治43年に計画された荒川改修事業により、岩淵地点から新たに荒川放水路を開削するとともに、岩淵水門から下流を隅田川と規定するようになった。江戸期には、隅田川は流れる区域により、千住付近から上流を荒川、浅草寺付近を宮古川や浅草川、再下流を大川という名称で呼んだり、『すみ』の音を生かして、澄、住、角、墨、隅の文字を当てて、住田川と呼んだりもした。

江戸期における隅田川のレクリエーション的利用について、『江戸名所図会』、『東都歳事記』、各種浮世絵より考察すると極めて高度で多様な利用が為されていたことが把握できる。

斉藤月岑は、天保五年（1834）発刊の『江戸名所図会』において、浅草川（隅田川の浅草周辺の別称）の両国橋あたりの状況を「この地の納涼は、五月二十八日に始まり八月二十八日に終わる。常ににぎわしと言えども、なかんずく夏月の間は、もっとも盛んなり。陸（高水敷）には観場、所せきばかりにして、その招賞（看板）ののぼりは、風にひるがえりて扁翻たり。両岸（堤内地）の飛楼高閣は大江（隅田川）に臨み、茶亭の床几は水辺（水際）に立て連ね、ともしびの光は玲瓏として流れに映ず。楼船扁舟所せく、もやいつれ一時に水面を覆いかくして、あたかも陸地に異ならず。弦歌鼓吹は耳に満ちてかまびすしく、じつに大江戸の盛事なり。」と述べ、隅田川が江戸文化の一大中心地であり、納涼期間の九十日間は水際から堤内地にいたる河川空間全てが、江戸市民のレクリエーションの場としておおぜいの人々でにぎわい、商業施設の密度が極めて高かったことがわかる。また、水辺環境では、水に映る光りの美しさや、水際に茶店が建連なっていたこと等がわかる。

三浦浄心の『慶長見聞集』（1619）には「慶長における江戸町民の遊観散策地は隅田川を第一とし、多きは都鳥の故歌を懐かしび・・」と江戸初期からの隅田川のリゾート空間としての知名度が高いことが明らかである。また、この頃、隅田川の納涼舟が流行したと言うことである。

こうした隅田川のレクリエーション的利用について、江戸学者の西山松之助は、江戸期の隅田川の毎晩の花火の競煙、町人たちの夕涼み舟が川を一面に覆う様、長唄や新内、義太夫や踊り、茶立や水練が同時に行われるさまを述べ、「隅田川は江戸の文化センター」と言及している。

このように、江戸市民による夏期三ヵ月間のレクリエーションのにぎわいや、四季折々のリゾート空間としての利用は、江戸期の隅田川の一般的なありかたであった。

3．隅田川のレクリエーション

江戸期の歴史的親水事例を研究する場合、詳細な地図や写真、設計図等が無いため、親水行為そのものの形態や親水行為と河川環境の関係等を把握することが困難である。しかし、浮世絵を考察することにより当時の様々な風俗や習慣を見出すことができる。特に、浮世絵の題材となったものには、隅田川に関連するものが極めて多いことが把握され、隅田川は西山松之助の言及するように、江戸文化の中心的場であったことがわかる。

夏場の蒸し暑さをしのぐ智恵として、江戸市民は隅田川で涼をとるため、河川空間に出掛け、様々なレクリエーションを楽しんだ。また、納涼避暑の地は所々にあるといってもこの、両国川（両国辺りの隅田川）を東都第一とすると言う。東に筑波が青く聳え、西には富士が白くそそり立ち、下流には浜町河岸、浜離宮、品川につづき、上流には待乳山、隅田堤も遙かに望めた。

隅田川は江戸の水路網の基幹であったため、船で全ての河川や運河に通行することができた。

以下に、江戸期の隅田川におけるレクリエーションの内容と河川環境の関係等について述べる。

(1)レクリエーションの形態

浮世絵で見る隅田川のレクリエーションは、大きく分けて①リバーウォーク、②お花見、③船遊び、④花火見物、⑤水遊び、⑥飲食・酒宴、⑦その他等

に分けられる。

次に、江戸期における上記の各レクリエーションの状況等について述べる。

①リバーウォーク

リバーウォークは、花見や夕涼みや花火見物など、四季おりおりの風物をデートや家族づれあるいは一人で楽しみながら川沿いを散歩するものをいう。みやげ物を買ったり、飲食酒宴の人々をウォッチングしながら、また、芝居見物や吉原詣での行き帰りなどの多彩な行為と一体となって、当時の人々の最もポピュラーなレクリエーションであったことが浮世絵から把握される。

リバーウォークで最もにぎわった場として両国広小路をあげることができる。ここでは、床見世や掛小屋、露店商、大道芸等の商業施設が連なり、江戸市民のレクリエーションの場として夜間営業も許可された。

②お花見

お花見は、現在も盛んなように、江戸期でも最も庶民的な楽しみの一つといえよう。

お花見は、リバーウォークをしながら花の下で酒を酌み交わし、お洒落の着飾り、踊ったり仮装を楽しんだり、桟敷で飲食・酒宴をしながら、あるいは船上で飲食・酒宴をしながらのものが多く、当時のお花見の楽しみ方が多彩であったことが分かる。

図1　リバーウォークの様子（堤防敷）歌川　広重画　隅田川の花見

③船遊び

船遊びは、現在も盛んなように、江戸期でも最も豪華でダイナミックな親水行為であった。

船遊びは花見、夕涼み、花火、月見そして雪見というように江戸の名所としての隅田川に根ざし、芸能を楽しみながら飲食・酒宴をするものや、魚釣りを楽しんだり、吉原通いの猪牙船など多彩であった。

また、浮世絵からは当時の船遊びで両国橋から中州まで川がびっしりと船で埋まるほどの壮観な賑わいを読み取ることができる。屋形舟の間をぬって、料理船が料理を売り漕ぎ、ウロウロ船は西瓜や桃や酒を売り、新内流し船など水上での商業もレクリエーションにつきものだった。

お洒落に着飾った娘や奥方、芸者たちも盛んに舟遊びを楽しんだが、このため、水際には桟橋が設けられており、護岸から水面までの距離が近かったことがわかる。

図2　水際の桟橋　英泉画　『花見帰り・隅田の渡し』

④花火見物

花火見物は、江戸時代には川開き期間三ヶ月間（5月28日から8月25日まで）楽しむことができた。浮世絵には、夕涼みをかね川沿にリバーウォークしながら、橋の上で花火を見物したり、船や料亭から、桟敷から楽んだ様子が描かれている。

享保十二年以降は玉屋と鍵屋による仕掛け花火も始まり、この花火を見るために両国界隈の人出は最高に達し、町奉行は両国橋の落下を恐れ、橋の通行制限を行ったと言う。

花火見物が見られる区間は、主に、蔵前橋から中州までの区間で、この区間が花火見物に最も適した環境であったことがわかる。

⑤水遊び

かつては、水際にどこからでも下りることができ、水も綺麗であったことにより、様々な水遊びが多く行われていたが、現在は隅田川の護岸整備や河川水の汚濁によって全く途絶えた遊びといえる。

江戸期の水遊びは、汽水域を利用した魚取りやシジミ取り、潮干狩り等の生活に密着した行為とともに、大山参りのためのみそぎが両国橋東詰めで行われ、神輿の水中渡御、水練など浅草寺の聖域と関連するものが多く、水に浸かってのレクリエーションが盛んだったことがわかる。

⑥飲食・酒宴

飲食や酒宴は四季折々のリゾートと関連して、常に行われていたことがわかる。水際の茶店や船宿から、高水敷の露店や小屋、堤内地の料亭や茶店などでは、雪見や花見、納涼の花火に月見と一年中レクリエーションの人々で盛況をきわめた。

4．河川の空間領域区分とレクリエーション

河川での様々な行為は、水面上での行為、堤防上での行為、橋上での行為等、河川の環境の状況によって異なるため、河川環境を一定の空間領域に分けて整理することにより、河川での行為を明確にすることができる。

そこで、河川内の各行為について次に示す空間領域に区分して分類するものとする。

(1)　隅田川の空間領域区分

隅田川の空間領域区分は、基本的に図3　に示すように河川の外周を形成し道路等が整備されている①堤内地、桜並木等の植栽空間であり散策に適した②堤防敷、洪水時に浸水空間となる③高水敷、高水敷と水面の間の④水際、⑤水面、浅草の辺りや日本橋中州や佃島で代表される島は⑥中州（島）はに分けられ、更に、河川の両岸を連結するために構築さ

れている⑦橋上が加えられて河川環境が構成されており、それぞれの空間で各特性に相応しい行為が行われていた。

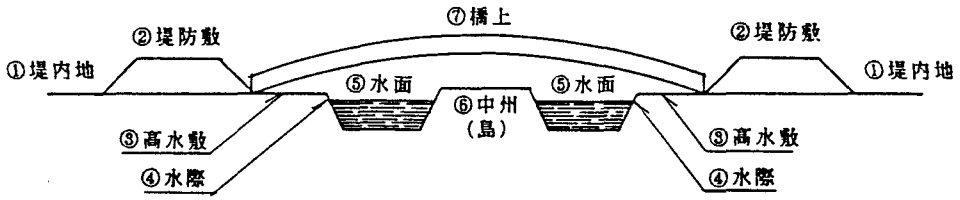

図3　隅田川の空間領域区分図

①堤内地

河川の外周を形成し道路等が整備され、河川空間領域のエッジであり、市街地のエッヂをなす。隅田堤の内側は田圃や名所の神社が散在し、茶店や料亭もあり、浅草周辺には聖域であり祭や市でにぎわう浅草寺があった。両国橋辺りでは、茶店料亭、芝居小屋が建ち連なり神田川河口の柳橋のにぎわいとつながり、さらに河口の浜町辺りからは日本橋川の周辺の商店や芝居小屋や水天宮へとにぎわいがつながり散策にも適していた。

このため、全ての文化的なレクリエーションやショッピング、飲食・酒宴、名所廻り等を楽しむ空間領域であった。また、隅田川への眺望はきわめて良く、堤内地からの花火見物や月見等のレクリエーションが盛んに行われた。

②堤防敷

桜並木等の植栽空間であり、リバーウォークや花見や月見、虫し聞き等に適した空間領域であった。

歌川廣重の『隅田川の花見』図1（1830頃）は見事にその空間を表現している。隅田堤は特に眺望に優れ、下方に広がる隅田川には帆掛け舟が浮かび、高水敷にはリバーウォークを楽しむ人々が行き交い堤防敷の満開の桜並木の下ではお酒落をした娘たちの花見が繰り広げられている。

③高水敷

洪水時に浸水空間となる空間で、両国辺りでは仮設の茶店や小屋が建ち、商業空間としてレクリエーション利用がなされた。広小路などでのイヴェントなど多人数の集まるオープンスペースとして活用された。隅田堤の辺りでは、草花や虫し聞きを楽しみ隅田川に浮かぶ宮古鳥を観察しながらリバーウォークすることができた。

④水際

ほとんど、どこからでも川に降りられるのが隅田川の江戸期の特徴であった。水際には蔵が建ち並ぶ地域や船宿や茶店が建ち並ぶ地域、自然石の護岸が連なる地域、草の土手の地域、蛇籠の地域等であっり、乱杭水制がみられた。浅草周辺や両国橋あたりには、納涼期間はレクリエーションのための船宿や茶店が建ち並び、舟からあがる桟橋が頻繁に設けられていた。江戸の夏は蒸し暑かったため、多くの人々が川からの涼を求めて水際に繰り出した。係留する舟も多く、水練やシジミ取りの人々が水から上がれるように護岸が低く、階段が設けられるなど人々の利用に適した整備が為されていたことがわかる。乱杭水制や自然石の護岸のため波が弱まり水面は比較的静かで、舟の乗り降りや水際での遊びに適した河川空間領域であった。

⑤水面

清水が流れ、様々な魚や鳥が見受けられた隅田川は、猪牙舟、屋根舟、屋形舟、釣り舟、帆掛け舟、渡し舟、伝馬舟等の様々な舟が行き交う基幹河川でもあった。そして、川開き期間中は、夕方から納涼の舟でごった返した。それは、水面を陸地と見間違

える程のにぎわいで、水上での商業や芸能が盛んに行われた。夜には両国広小路の商店の灯火が揺れ動き、涼し気な空間であった。

⑥中州（島）

日本橋中州は船遊びの船が立ち寄る水際の料亭で有名である。しかし、享保十八年頃から、これまで中州を中心としていた納涼の慣例が、やや上流の両国へと映って行き、にぎわいを失った。水際の護岸は自然石積みで、船に乗るための梯子が掛けられていた。

また、浅草の辺りには草が生い茂った中州が数ヶ所見受けられ、趣のある柔らかい河川空間を構成していた。

白魚漁で有名な佃島は現在に残る隅田川唯一の島でありバーウォーク、住吉神社の祭が水中で行われ、水際まで草が繁り木々の多い漁村であった。

⑦橋上

江戸期には五橋が掛けられるようになったが、当時からレクリエーションにも使われていた。

なかでも、両国橋が最も賑わいのある橋であった。

千住大橋や新大橋では、橋をはさんだ町どうしで橋上の綱引きがおこなわていたが、けんかが絶えなくなり取り止めになったと言う。

享保十二年には両国橋の上流と下流とで玉屋、鍵屋による仕掛け花火もはじまり納涼や、花火見物で多くの人々が集まったため、町奉行は橋の落下を恐れ、橋の通行規制を行った。橋の上からは眺望も良く、川を涼みながら楽しむことが出来る空間領域であり、レクリエーションの場としても特徴的な空間であった。

河川の空間領域区分とレクリエーションとを考察すると、多彩なレクリエーションが行われていた区間では、それに適した河川環境に整備されていたことが把握される。都市河川ではあるが、川への出入りが容易な河川環境であったため、豊かな川との係わりを持ち、多彩なレクリエーションを多数の人々がおこなった。

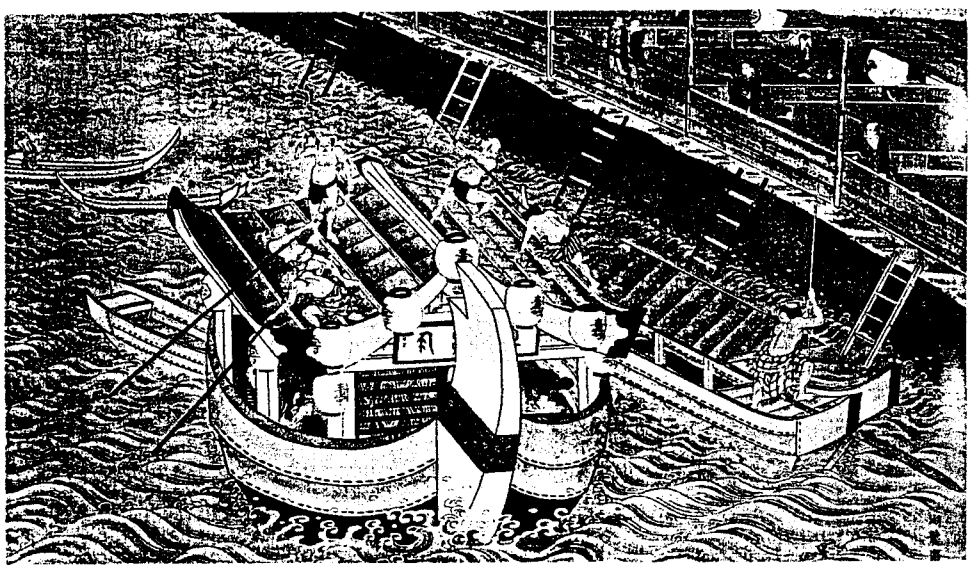

図4　水際の施設　湖龍斎画　『中州遊船の図』

5．レクリエーション別利用区間

隅田川の範囲は、岩淵水門から佃島までの約20kmの範囲であり、にぎわいの中心地の両国橋を0kmに設定し、上流方向はプラスとし下流方向はマイナスとし、1kmづつの区分を現在の橋の名前や地名で表示した。浮世絵から分類した代表的なレクリエーションを空間区分し、それぞれの河川区間にプロットし表.1を作成した。

１８km～１１km区間　岩淵水門～尾久では、尾久の高水敷でのピクニックや桜草つみ、投網などが見られるが、背景は田舎の風景となり、都市河川としての隅田川は白髭橋から下流の部分であったことがわかった。

４km・３km・２km区間　白髭橋～吾妻橋では、お花見が堤内地・堤防敷・高水敷そして水面から行われ、リバーウォークは堤防敷と高水敷、船遊びは水面、飲食酒宴が２km付近の高水敷で始まっている。堤内地・堤防敷・高水敷・水面では、この区間ではレクリエーションのプロット数は８で、４種類のレクリエーションが行われていたことが把握できる。桜の並木道が整備され、水面から堤内地にリバーウォークするため、桟橋も設けられていた。堤内地の飲食酒宴のためにピロティ形式の茶店も設けられ、眼下に満開の桜と隅田川の眺望を楽しむレクリエーション施設であった。

２km・１km区間　吾妻橋～厩橋では、堤防敷の桜並木が終わり花見が途切るが、リバーウォークと船遊びや飲食酒宴は継続し、このようなレクリエーションが定着していたことがわかった。

１km・０km・－１km区間　厩橋～新大橋では、リ

表１　区間別親水行為状況

距離	地名	空間区分 堤内地	堤防敷	高水敷	水際	水面	中州	橋上	備考
18km	岩淵水門								
17km									
16km	新神谷橋								
15km	新田橋								
14km									
	豊島橋								
13km									
	石井神川								
12km	荒川遊園								
	小台橋								
11km	尾久橋			◎ピクニック					ピクニックで桜草つみ
10km									
9km	尾竹橋								
8km	荒川自然公園								
	千住大橋								
7km	常磐線			リバーウォーク					
	汐入								
6km									
	隅田		お花見			船遊び		お花見	
5km	汐入公園								
4km	白髭橋	□	□	□		○		□	
		□	□	□		○		□	
3km	桜橋	□	□	□		○		□	
	言問橋	□	□	□●	飲食酒宴	○		□	
2km	吾妻橋山谷堀	□	□	□●	花火見物	○水遊び		□	花火見物
	駒形橋			●		○			
1km	厩橋			●		○	飲食酒宴		
	蔵前橋	☆			●☆	○ｼ☆		☆	
0km	両国橋	☆			●☆	○ｼ☆		☆	ｼ水練所
	神田川と柳橋	☆			●☆	○ｼ☆		☆	
-1km	新大橋　中州	☆			☆	○ｼ☆	●	☆	
	清洲橋					○ｼ	●		注：新大橋から下流は高水敷が整備されていないと思われる
-2km	隅田大橋中州					○ｼ	●		
	永代橋					○ｼ			
-3km	佃大橋　佃島					○ｼ			
	月島								
-4km	勝鬨橋								
	築地市場月島								
-5km	浜離宮								
-6km	日の出桟橋								

バーウォークと船遊びが継続し、堤内地・水際・水面で花火見物、水面での水遊びが新たに加わり、飲食酒宴は高水敷から水際へと移行し行われている。堤内地・堤防敷・高水敷・水際・水面・中州・橋上で同区間にはレクリエーションのプロット数が１０で５種類のレクリエーションが行われ、にぎわいのあるレクリエーションに相応しい商業施設が水際に高密度に設けられていた区間であったことがわかった。

－１km・－２km・－３km区間では、リバーウォークと船遊びや水遊びが継続し、花火見物が途絶え、飲食酒宴は中州で行われていた。

このように、区間別レクリエーションの検討から江戸期の隅田川では、代表的なレクリエーションであったお花見、リバーウォーク、花火見物、船遊び、水遊び、飲食酒宴の６種類が、区間を空間区分に沿う形態で、継続あるいは途絶えながら行われ、高密度なレクリエーション空間が構成されていた。

船遊びが見みられる区間は、主に白髭橋から浜離宮までの延長９kmの区間で、この長い区間全域に船遊びのための桟橋や船宿などの施設が整備されていた河川環境であったことがわかる。

その中でレクリエーションが最も盛んに行われた区間は、浮世絵でみる限り、主に現在の白髭橋から佃島までの延長約７kmの区間で、それぞれのレクリエーションに適した施設が整備された河川環境であったことが把握された。

６．おわりに

江戸期の隅田川は、様々な河川施設が整備され、江戸市の代表的なレクリエーションの場であり素晴らしいリゾートの場として貴重な空間であったと考えられる。

その中でレクリエーションが盛んに行われた区間は、浮世絵でみる限り、主に現在の白髭橋あたりから佃島までの延長約７kmの区間であり、この間では当時の代表的なレクリエーションであったお花見、リバーウォーク、花火見物、水遊び、船遊び、飲食酒宴の６種類に適した施設が整備されていたことが把握された。

当時は、河川での施設整備が面的に上流から下流へと充実し、また、複数のレクリエーションを許容することのできる利水環境であったため、にぎわいのある空間が創出されたと考えられる。

そして、隅田川のレクリエーションは、当時の蒸し暑い気候に適し、花火見物にしても川開き期間の９０日間、納涼を兼ねて毎晩多くの人が楽しんだ。また、船遊びも両国を中心とした中流域で盛んに行われ、隅田川はまさに江戸文化の中心として、大都市江戸に相応しい魅力的な都市河川として親しまれたと考えられる。

現在、隅田川では緩傾斜護岸など水際のテラス工事が着々と進み、伝統的な雛流しや都鳥をかたどった燈籠流し等が復活され、各種のイヴェントにも利用できるようになった。今後は、これらの施設に加え、水際のレストランやカフェテラス、商店、船宿や桟敷、桟橋及び植栽などが整備されることにより東京の市民のレクリエーションを支える河川空間となるものと期待される。そのため、今後の隅田川をはじめとして都市河川環境の整備にあたっては、江戸期の隅田川に見られるような市民のレクリエーションに基づいた河川整備や利水方式を参考とされることが望まれる。

本研究を行うにあたり、江戸学の西山松之助先生アルゴ都市設計の内山国男先生に御協力を頂いたことをここに記して謝意を表す。

参考文献

小池、玉井：都市河川の環境評価構造に関する研究　土木計画学研究・論文集、1988.11
高橋　　長屋、渡部：水辺空間を描いた浮世絵と図会による行為形態の研究　日本建築学会・関東支部研究報告集、1988
宮村忠　：水害　中公新書
中村良夫　：風景学入門　中公新書
石崎正和　：近世文書にみる堤高に関する研究　日本土木史研究発表会論文集、1989
土木学会編：水辺の景観設計　技報堂
松浦、島谷：水辺空間の魅力と創造　鹿島出版会
斉藤月岑　：江戸名所図会　角川書店
葛飾北斎　：隅田川両岸一覧
歌川広重　：名所江戸百景　集英社
風俗画報　：東京名所図会
西山松之助：隅田川は江戸の文化センター季刊すみだがわ、1983、14号　隅田川クラブ